

都市の空間性のもとにあるのは、止まることのない流れ、都市生活者の間の相互運動、風景をつくっている空間の同時的読みの絡み合いである。

この作家達は世界の大都市とそれを形作る風景の知覚的把握のモデルを示した。しかし、こうした作品はいかに社会的に拡張したのだろうか？この問題は難しい。

ロベルト・アルト (Roberto Arlt) 1900-1942
ブエノスアイレス

ルイ＝フェルディナン・セリーヌ (Louis-Ferdinand Céline) 1894-1961
パリ、ロンドン

アルフレート・デーブリン (Alfred Döblin) 1878 - 1957
ベルリン

ジェームズ・ジョイス (James Augustine Aloysius Joyce) 1882-1941
ダブリン

ジョン・ドス・パソス (John Dos Passos) 1896-1970
ニューヨーク
『マンハッタン乗換駅』

つまり、都市とは感覚や音、匂いの束なりであり、都市はその動きやリズム、テンポから捉えられる。そしてそこに住む者は、日常的に自分なりの都市のモニターングをしている。その者の知覚的な習慣や感覚的文化をはじめ、不安や警戒心の数々、情動的地図、表象・感情のシステム、内省の方法、そして都市の歴史をどのくらい知っているか、また社会をどの程度解読できるかによってこのモニターングは固有のものとなっている。

新規の観察者と新しい「透視体制」が打ち立てられたことによって都市の視覚的把握が変容する。後には、写真、そして映画が新しい知覚習慣（例えば、ズーム、ローアングルショット、トラベリングなど）をもたらしたり、夜の活動が広がったこと、つまり「新しい夜の私」が生まれたことで、ものの見方が変わった。十九世紀にはガス灯、そして電気の配備によって、陰や闇、光りの線などの認識が大きく変わった。

ジョナサン・クレアリー (Jonathan Crary)

シモーヌ・ドゥラットル (Simone Delattre)
「…夜の活動が広がった…」『暗い十二時 Les Douze heures noires…』
Les douze heures noires. La nuit à Paris au XIXe siècle, Paris, Albin Michel, coll. « Bibliothèque de L Evolution de l humanité, n° 43 », 2004.

ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth) 1770-1850
ロンドンの詩

シャルル・ピエール・ボードレール (Charles Pierre Baudelaire) 1821 - 1867
「十九世紀には、伝統的にうるさいものであったお祭りや余興的な即興の催しは禁止されるようになった。ボードレールが日曜日について書いたように、突然の静寂は不安を引き起こすものとなっていった。」
ベンヤミンに関連するがボードレールが強調したのは、商品の重要性。

都市風景のこの豊かさはロマン派の作家によってすでに挙げられている。

都市の感覚的認識では、たいていの場合、都市とは石からなる建築物でしかなく、ある意味、静物画であるかのように捉えられている。しかし、これほど間違っていることはない。都市の感覚的認識とは、このような端的な物質性を大きく超えるものである。
都市のアイデンティティーはその構図やパースペクティブだけでなく、臭いや動き、そして主に音からも成り立っている。特に二十世紀以降、他の風景と同様に、都市風景とは動きのある風景である。

<都市の感覚的認識>について

作成：木下知威

オノレ・バルザック (Honoré de Balzac) 1799-1850
『人間喜劇』
「十八世紀のパリは、細分化されたとしかしいようがないほどになっている。絵になるような風景や、「モチーフ」や典型的な場所の集合ではなく、その全体性から都市が題材とされるのは、近代小説が登場してからであった。その最も良い例はバルザックだ。」
「長椅子が小説に出てきても、当時の椅子が長椅子だったことはない。作家がやっているのは、都市をどう読み取るかということ。証拠を残すより、都市に対する読解を見せている。」

パリの例に限って言えば、こうして十九世紀から二十世紀にかけて、都市は視覚・聴覚に新たな姿をもち、日が落ちるとあらわれてきた陰の都市とはなくなってきた。

ヴィクトル・ユーゴー (Victor Hugo) 1802 - 1885
『パリのノートルダム』

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) 1812 - 1870
『オリバー・ツイスト』

ウージェーヌ・シュエ (Eugène Sue) 1804-1857
新聞小説、パリの秘密

エミール・ゾラ (Émile Zola) 1840 - 1902
『パリの胃袋』

マクシム・デュ・カン (Maxime Du Camp) 1822-94
文学者・ジャーナリスト
「ノートルダムの上で、パリ全体が機械のようにみえたという。機械としてのメタファーは重要。これは鉄道の発生と同時代」
「パリはやがて多種多様の歯車のついた機械のようにみられるようになる」

音の風景に関して

1)「職業的わめき声」が徐々に減っていった。
2) 鐘楼の音が次第に許されないものになり、鐘楼のメッセージの意味が薄れてきた。
3) 動物の存在を示す音や動物を使った乗り物の音が消える。
4) 蒸気機械(第一次工業革命)がおこす騒音が、タイヤの滑る音や持続的モーター(特に電動)の音などの微弱ながらも絶え間ない音に変わっていった。
5) さらに目立たない電気機器の音や、急ぐようになった歩行者の振るまいの変化—例えばうるさく呼び合うことはしなくなる。」
「同時に、新しい音声機器や警報などによって音の風景は整えられながらも(サイレン、警笛、クラクションなど)、さらに複雑になる。より分かりやすくなり、混沌さがなくなってくる。都市の音の風景の発達には、住民の動きや住民同士の間のつながりの変化もみられる。」

ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel) 1858- 1918
「このような新しい振る舞いのため、バスや地下鉄の中で、人は沈黙を守りながら他の人の見るのだが、これはゲオルク・ジンメルが指摘するところである。」

群衆についてはジンメルも指摘。
1、自由
2、孤独

ヘーゼル・ハーン&ヴァネッサ・シュヴァルツ (Hazel Hahn et Vanessa Schwarz)
「…大通りは、さまざまな新しい方法でモードや近代性(モデルニテ)を視覚的にうたえかける場所となった。そしてそこでは、トラムウェイや乗り合いバス、サンドイッチマンなど様々なものが動き回っている。(中略)この時代のパリが二十世紀のアメリカの前身であるとした。…」
新しい大衆の出現。特性は「無関心」群衆の各個人があらわれたり、消えたり。

ルイ・パスツール (Louis Pasteur) 1822 - 1895
「こうした様々な過程は、都市の嗅覚的風景の変化についてもいえる。伝染理論(十九世紀前半)による急速な変化やパスツール(世紀末)の思想の勝利による変化があった。こうした変化は、公共衛生や塩化物の使用、衛生管理に努める制服を着た警官などからみられる。」

ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) 1892 - 1940
「1860年代は大きな変化がでてきた転換期であった。それは商品の成功や与えられた食料の誇示によってはっきりとみられる。ワルター・ベンヤミンが研究した例の「パッセージ」の重要性からもこうした変化が準備されていたことがうかがえる。」
1840-50年代を起源とするパッセージの重要性は、
1、鏡があること 都市のなかにつづる自分の身体をみる事ができる。
2、そぞろ歩き(flâner)散歩、さすらう人たち。気ままに歩くようになったのは、歴史のひとつの事実。

ルイ＝セバスチャン・メルシエ (Louis-Sébastien Mercier) 1740-1814
「十八世紀パリ生活誌」(タブロー・ド・パリ)、幻想文学
ふたつの顔をもったパリを記述。
1、文化都市 古典的モデルに従った都市。18世紀に規範化されたもの。明るい街では、歩いている人も大きな声を出しながら歩く。出身地、縄張り、呼吸のために叫ぶ。コルバンも幼少時代、ガラスと叫びながら歩くガラス職人を覚えていた。
2、陰としてのパリ

アレクサンドル・パラン・デュシャトレ (Alexandre Parent Duchatelet) 1790-1836
「敬虔なカトリックで医学博士でもあり、二つの社会階級について研究していた。一つはゴミ清掃者、下水を扱う人、動物の革はぎ職人、二つは売春婦の研究をした。都市と有機体のメタファーを用いて、「都市の排泄機能についての学者」と自ら呼んでいる。排泄機能というのは単に下水のことだけでなく、道徳的な排泄物や心理的排泄物も含んでおり、売春婦などをそのように有機体のメタファーを用いながら、研究対象とする。」
秩序のないちらかった家で秩序を回復させるためには、ある一部分にその秩序を取り乱す原因になるものを押し込むことから始めよ、と。

影響